

埼玉県現代俳句協会報

第84号

2023年3月15日



感 思

埼玉県現代俳句協会会長

山崎 十生

このたび埼玉県現代俳句協会の規約に則り三期六年の会長職を任期満了にて退かせていただきます。在任中は、各役員を始め、会員の皆様の御協力を戴き感謝申し上げます。

しかし、ここ三年は新型コロナウイルスの感染拡大に依って思うような運営が出来なかつたことが悔やまれます。まだまだ新型コロナウイルスの感染は止みませんが充分に対策を取り活動をなされることを祈念致します。

思えば、初代会会長の佐久間東城氏以下

柴田白陽、関口比良男、星野紗一、島田妙子、桑原三郎各氏と続きまして後を承けて会長

職に就きましたが、その中でも大きな事件“と言えるような二つの特別な逝去がありました。それは、俳句界の重鎮金子兜太氏と副会長で事務局長兼務の岡田一夫氏の逝去には驚愕と致しました。まさに茫然自失という心持ちでした。

兜太氏には、十九歳で出した処女句集の『上映中』から近著まで多くの感想の葉書を戴きました。令和五年一月五日から八日まで川口総合文化センター・リアのギャラリーで私の俳句生活六〇周年記念・山崎十生俳句展にて来展者の皆様に見て頂きました。その中でも『原発忌』という句集に對しまして兜太氏が「相変わらず自由ですな」と独得の字体で書いて下さったことは一生忘れられません。岡田一夫氏とは、高校生からの知己で共に活動して来ました経緯があります。関口比良男主宰の「紫」一門として活動された時代もありました。幅広い俳句

活動の中で桑原三郎氏の「犀」の編集長として活躍されていた事は、同じ釜の飯を食った仲間としても嬉しいことでした。それが、一年あまりの闘病生活で、この世を去りました。亡くなる前日は「少し入院生活が長くなりますので」という電話をいただいた矢先の訃報でした。会長職在任中にお二方の逝去があり、副会長であった星野光二氏の逝去もあり淋しい六年間ではありましたが、その中で個人的には第十句集の『未知の国』第十一句集の『銀幕』の刊行。第十五回川口市文化賞、第六十四回埼玉文化賞を芸術部門で受賞しました。俳句部門では第五十四回埼玉県文化団体連合会の文化選奨を頂き明るい光がみられたことは望外の喜びです。

最後に、現代俳句協会も一般社団法人として組織変更が移向されるようです。埼玉県現代俳句協会も新しい体制の下試験を乗り越えて益益の発展と、会員の皆様の活躍と御健康を祈念致しまして御礼の言葉に代えさせていただきます。ありがとうございました。

第二十回 埼玉県現代俳句大賞

大賞

夜が長過ぎる

鳥山 由貴子

水の秋鳥はかなしい歌うたう
櫛紅葉人差し指の火傷痕
木の突降る底なし沼に木の突降る
何もかもうやむや背高泡立草
竈馬ハロゲンランプで照らしてやる
暗転の舞台にひかる蜘蛛の糸
無人飛行機銀河の果に不時着す
遠火事のごとく縄文火焰土器
花野の夜サーカスがはじまっている
だまし絵の中の階段十三夜
こむら返り海鳴り夜が長過ぎる
鳴いているのは月の裏側蟻蝸蚯蚓
真夜中の電話さびしい狐から
炭団坂菊坂暗闇坂濁酒
十一月化石のように目を醒ます



思いがけない大賞の受賞
とてもうれしいです。これ
からも楽しく俳句を続けよ
うと思います。選者の先生
方、どうもありがとうございます
でした。

- ◆鳥山 由貴子（とりやま ゆきこ）
- ◆一九五二年生まれ
- ◆所属結社「海原」同人
- ◆二〇一六年「海程新人賞」受賞
- ◆二〇二二年「海原賞」受賞

準賞

秋思

杉本 青三郎

ポケットの秋思わかつていて触れる
十字螺子のさみしさ無花果の口
いぼむしりひねもすシャドーボクシング
不機嫌をぶらさげてゆく吾亦紅
貝割菜両手ひろげて降りてくる
泡立草作り笑いのこれでもか
生返事釣瓶落しを連れてくる
時のくぼみに挟まっている白夜
夕顔の羽化ゆるやかを昇りつめ
追いこしてはいけない時間揚羽蝶
麦秋がなだれ込むわたしのすきま
春愁い出口あるのに出たくない
塗りつぶしたくなる白鳥の正面
守るものあり残雪のかたちせり
蒼天の痛点となる冬桜



この度は埼玉県現代俳句大
賞準賞をいただきありがとうございます
ございました。選者の先生方
ありがとうございます。高
校一年生から句作を開始した
にも拘わらず、途中五年以上句作を中断した
りと、俳句と正面から向きあうようになった
のは、四十代を過ぎてからでした。これから
も、俳句と悪戦苦闘していきたくと思っています
ます。本当にありがとうございます。

- ◆杉本 青三郎（すぎもと せいざぶろう）
- ◆一九五八年生まれ 川口市在住
- ◆所属結社「歯車」「麦」
- ◆一九九七年 現代俳句協会入会
- ◆二〇二〇年 第三回口語俳句大賞受賞

準賞

満月の記憶

後藤 よしみ

虫ピンを抜き飛び立たす夏の蝶
満月の記憶の岬よりおよぐ
ピースと記す指より月にぬれはじむ
照り返す秋日が川の水ぬらす
天高しカレーの市民撃たるや
行く方の足踏み入れてより花野
風雨より人のおそろし曼珠沙華
日の欠片失落の黄の曼珠沙華
霧深しペテロが三度否といひ
たましいのしめりゆくまで鉦叩
神かくすものに童と月の虹
すがれ虫間に間に吾の声をおき
罇先の冷ゆれど心貫けず
釉薬の茶碗の丸み秋時雨
詩を焚ける火に近づきぬ冬の蝶



詩想をもたらず神は、詩神
と言われる。ギリシャ神話な
らムーサであり、日本であ
ればスサノヲノミコトという。
しかし、私はいまだかつてそ
の顔を拝したことはない。今回の受賞は、詩
神が舞い降りてくださったというよりも満月
の神のいたずらであろうか。それよりも、同
じブロッタの杉本氏と受賞したことをともに
喜びたい。今後は埼玉県現代俳句協会の一員
として働きたいと願っている。

- ◆後藤 よしみ（ごとう よしみ）
- ◆一九五八年生まれ 戸田市在住
- ◆二〇一八年 全国俳誌協会賞受賞
- ◆二〇二二年 現代俳句協会評論賞佳作
- ◆現代俳句協会会員 鷗座・小熊座同人

第20回埼玉県現代俳句大賞上位得点一覧

賞名	順位	得点	作品番号	題名	作者名
大賞	1位	30	18	夜が長過ぎる	鳥山由貴子
準賞	2位	20	24	秋思	杉本青三郎
〃	3位	20	28	満月の記憶	後藤よしみ
佳作	4位	19	29	ゆらぎ	金子和美
〃	5位	18	1	旅人の木	鈴木良二
〃	6位	18	11	寧日	田口武
〃	7位	18	32	ひよんと生まれて	古橋淑子
〃	8位	15	9	短夜	増田信雄
〃	9位	14	19	ぼくらはみんな	渡辺智恵
〃	10位	13	15	蟬の殻	柴田燭鬼

第20回埼玉県現代俳句大賞選考一覧

順位	一位	二位	三位	四位	五位	六位	七位	八位	九位	十位
得点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	1点	1点	1点	1点
選考者名	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号	番号
桑原三郎	28	18	17	14	10	6	7	9	21	22
島田妙子	23	33	31	14	10	11	34	7	15	9
石寒太	1	28	29	30	27	31	23	26	16	19
岩淵喜代子	32	28	9	18	26	10	19	12	16	14
山崎十生	24	29	11	18	17	2	27	35	5	15
加藤いさむ	29	32	35	27	28	26	15	9	6	30
関田誓炎	1	15	18	12	4	19	21	25	35	34
山本鬼之介	12	15	7	18	19	13	23	9	17	28
網野月を	19	25	1	24	4	6	27	26	7	18
後藤章	9	32	11	24	21	10	34	29	8	30
田中朋子	18	24	17	29	26	27	21	28	7	23
原雅子	6	11	5	8	1	9	12	32	19	10
堀之内長一	35	18	11	24	19	20	27	32	36	6

第二十回
埼玉県現代俳句大賞応募作品

- | | | | |
|--|-----------------|--|-----------------|
| 18 夜が長過ぎる
17 青林檎
16 わんライフ
15 蟬の殻
14 平凡に生き
13 望の月
12 春夏秋冬
11 寧日
10 土の匂ひ
9 短夜
8 夏の蝶・秋の蟬
7 わが家系
6 槌音
5 虫愛づる
4 三月十日
3 補充兵手帳
2 水鏡
1 旅人の木 | 作品
番号
作品名 | 36 途(みち)なかば
35 偲ぶとは
34 虹を見る
33 他界説
32 ひよんと生まれて
31 哀情
30 ときめきて
29 ゆらぎ
28 満月の記憶
27 独白
26 月時雨
25 秋夕焼
24 秋思
23 草の花
22 岩肌
21 一音
20 秋行くや
19 ぼくらはみんな | 作品
番号
作品名 |
|--|-----------------|--|-----------------|

令和4年度事業報告

(自令和4年1月1日～至令和4年12月31日)

実施日	事業内容	備考
1 1月23日(日)	監査会	会計監査(パルコ9F)
2 2月13日(日)	理事会 ・さいたま文学館午後1時より	○定期総会に向けての決議 その他
3 3月15日(火)	会報第82号発行	○埼玉県現代俳句大賞他
4 3月27日(日)	定期総会・一句会	○コロナ感染拡大により中止 ○定期総会・・・書面議決へ ○一句会中止 ○第19回埼玉県現代俳句大賞発表 (詳細は「会報82号」に掲載)応募総数 36篇 ☆大賞 なし ☆準賞5名「誰からも」内野義悠・「漂着す」茂里美絵 「森」岡田行雄・「退屈」金子和美・「長電話」木下周子
5 3月27日(日)	現代俳句協会通常総会	○コロナ感染拡大により中止
6 7月10日(日)	第44回埼玉俳句大会 担当:熊谷ブロック	○熊谷市立文化センター文化会館 出席者50名 当日投句(当季雑誌1句11時30分締切「受付10時」) 講演 田中重美先生・演題 金子兜太俳句の魅力
7 8月1日(月) ～10月17日(月)	第20回 埼玉県現代俳句大賞募集	※埼玉県現代俳句協会員に限る
8 9月15日(木)	会報第83号発行	○第44回埼玉俳句大会他
9 10月22日(土)	第20回吟行俳句大会 担当:北埼玉ブロック	加須市民総合会館(市民プラザかぞ)3F 囀目2句(出句締切12時)出席者51名
10 11月12日(土)	現代俳句協会全国俳句大会	投句締切8月1日必着
11 11月25日(金)	ブロック長会議 さいたま文学館午後1時30分～	○令和5年度定期総会に向けて ・事業計画の実施状況他・役員改選について
12 随時	新会員募集	○推薦・紹介
13 随時	会報編集会議	○会報編集・校正等
14 随時	事務局作業	○会報発送事務等

令和4年度会計報告

(自令和4年1月1日～至令和4年12月31日)

収入の部

(単位 円)

項目	金額	摘要
繰越金	695,841	前年度より
年会費	269,000	1,000×269名
本部交付金	590,500	2,000×286名 1,000×12名 600×2名 300×1名 5,000×1名
一般事業費繰入金	8,913	
雑収入	4	受取り利子
合計	1,564,258	

支出の部

(単位 円)

項目	金額	摘要
一般事業費	365,931	俳句大賞・俳句大会・通信句会・ブロック活動費(R5年度活動費を含む)
会議費	66,000	諸会議交通費弁済費用
印刷・製本費	189,750	会報82号・会報83号
通信・運搬費	114,292	会報等の送料他
分担金	10,000	県文化団体連合会
消耗品費	21,099	コピー用紙・インク・ラベル他
事務局費	150,000	事務局活動費
雑費	54,248	会費振替手数料
合計	971,320	

収入 1,564,258円 - 971,320円 = 592,938円 592,938円 + 500,000円(積立金) = 1,092,938円

令和5年1月28日 上記金額592,938円を次年度に繰り越します。

会計 渡邊 樹音



監査報告

この会計報告書について、監査した結果すべて正確であることを認めます。

令和5年1月28日

監事 田中 朋子



立会人 山崎 十生



令和5年度事業計画（案）

（自・令和5年1月1日～至・令和5年12月31日）

実施日	事業内容	備考
1 1月28日(土)	監査会	会計監査（パルコ9F）
2 2月12日(日)	理事会 ・さいたま文学館（講座室1） ・午後1時30分より	○定期総会に向けての決議 ○役員改選について ○その他
3 3月12日(日)	定期総会・一句会 埼玉県現代俳句大賞発表 ・さいたま文学館1Fホール ・午後1時より	○定期総会 ○一句会 ○第20回埼玉県現代俳句大賞発表 （詳細は「84号」に掲載）・応募総数36篇 ☆大賞「夜が長過ぎる」 鳥山由貴子 ☆準賞「秋思」 杉本青三郎 ☆準賞「満月の記憶」 後藤よしみ ☆佳作「ゆらぎ」金子和美・「旅人の木」鈴木良二 「寧日」田口武・「ひよんと生まれて」古橋淑子 「短夜」増田信雄・「ぼくらはみんな」渡辺智恵 「蟬の殻」柴田獨鬼
4 3月18日(土)	現代俳句協会通常総会	○東天紅（上野店）午後3時～
5 7月8日(土)	第45回埼玉俳句大会 担当：埼玉葛ブロック	○春日部市民文化会館大会議室（3F）受付10時 講演 柏田雄三先生（昆虫芸術研究者） 演題「昆虫の句碑を訪ねる」 事前投句（1句高点制）当日投句（1句高点制）
6 8月1日(火) ～10月17日(火)	第21回 埼玉県現代俳句大賞募集	※埼玉県現代俳句協会員に限る
7 9月1日(金)	会報第85号発行	○第45回埼玉俳句大会他
8 10月29日(日)	第21回吟行俳句大会 担当：入間ブロック	場所未定
9 11月11日(土)	第60回現代俳句協会全国俳句大会	
10 11月26日(日)	ブロック長会議 さいたま文学館	○令和6年度定期総会に向けて ・事業計画の実施状況等
11 随時	新会員募集	○推薦・紹介
12 随時	会報編集会議	○会報編集・校正等
13 随時	事務局作業	○会報発送事務等 事業計画の実施状況等

令和5年度予算書（案）

（自・令和5年1月1日～至・令和5年12月31日）

（単位 円）

収入の部

項目	金額	摘要
繰越金	592,938	前年度より
年会費	300,000	1,000×300人
本部交付金	600,000	2,000×300人
合計	1,492,938	

支出の部

（単位 円）

項目	金額	摘要
一般事業費	500,000	俳句大賞・俳句大会・吟行会・通信句会・ブロック活動費(R6年度を含む)
会議費	80,000	諸会議交通費弁済費用
印刷・製本費	200,000	会報84号・会報85号
通信・運搬費	150,000	会報等の送料、他
慶弔費	20,000	
分担金	10,000	県文化団体連合会
消耗品費	20,000	コピー用紙、インク、ラベル他、事務用品
事務局費	150,000	事務局
雑費	70,000	会費振替手数料、他
予備費	292,938	
合計	1,492,938	

積立金

（単位 円）

項目	金額	摘要
積立金（収入）	500,000	前年度より
合計	500,000	

埼玉県芸術文化祭二〇二三協賛事業
第四十五回 埼玉俳句大会作品募集

本大会は埼玉県現代俳句協会が主催する俳句大会です。俳句を愛好する方々の応募、参加を心よりお願い申し上げます。お誘いあわせの上ご参加ください。協会員以外の方々のご参加を歓迎いたします。

大会要項

日時 令和五年七月八日(土)
受付開始十時 開会十三時
会場 春日部市民文化会館大会議室(三階)
※東武鉄道春日部駅東口下車 徒歩約十分
春日部市粕壁東二一八六一
TEL〇四八(七六一)五八一

講演 柏田雄三先生(昆虫芸術研究家)
後援 演題「昆虫の句碑を訪ねる」
埼玉県文化団体連合会・春日部市・春日部市議会 春日部市教育委員会 春日部市芸術文化振興会 埼玉県俳句連盟 春日部市俳句連盟

協賛 埼玉県・埼玉県教育委員会
表彰 埼玉県現代俳句協会
①事前投句 埼玉県知事賞、春日部市長他三十位まで表彰(一句高点制、同一人入賞は上位のみ顕彰)
②当日投句 埼玉県知事賞、春日部市長賞他二十位まで表彰(一句高点制、同一人入賞は上位のみ顕彰)

担当 第四十五回埼玉俳句大会実行委員会
(実行委員長 春日部市俳句連盟会長 高橋 邦夫)

事前投句募集要項

作品 二句一組・何組でも可(未発表作品に限ります。前書、ルビは認めません)
投句料 二句一組につき千円(必ず句稿と定額小為替等を同封してお送りください。投句料の無いものは無効とします。)

締切日 令和五年五月十二日(金)(必着)
投句先 〒三四〇〇三六 春日部市大沼五一五六一三
石原 道明方 埼玉俳句大会係
TEL〇九〇(九八一五)五三三五

当日投句要項

作品 当季雑詠 二句
当日投句要項 (受付にて投句用紙配布 当協会員以外の方も投句できます。)
投句料 千円(受付にてお支払いいただきます)
投句締切 午前十一時三十分締切 ★投句終了後十三時の開会まで自由時間です。
懇親会 懇親会の開催は未定。
(実施の場合 会費 四千元)

第二十回埼玉吟行俳句大会

令和四年十月二十二日開催

第二十回埼玉吟行俳句大会を加須市の市民総合会館(市民プラザかぞ)において開催。担当は北埼玉ブロック。当日の参加者は五十一名とやや寂しい参加であったが、充実した作品が多数生まれました。

来賓はご多忙のなか角田守良加須市長、現代俳句協会の後藤章幹市長の御臨席を仰ぎ大会に華を添えて頂いた。

加須駅から近く、俳句の素材になりそうな神社や寺院があり、吟行には恵まれた立地ではないかと主催者は感じている。作品から主なものをあげてみると、不動ヶ岡不動尊(總願寺)の芭蕉句碑他、龍蔵寺の大銀杏、兜太句碑、玉敷神社の神楽殿・大銀杏、騎西城関連、釜屋の酒蔵、千方神社の石敢當、加須の鯺鮓と鯉職、田園風景など多彩。

成績は次の通り。

- ◆第一位 埼玉県知事賞 折原野歩留
秋風になり切っている市旗国旗
- ◆第二位 埼玉県教育長賞 加藤いさむ
狛犬の口の中まで紅葉晴
- ◆第三位 埼玉県芸術文化祭実行委員長賞 山崎 十生
二の鳥居まで椎の実の多かりき
- ◆第四位 加須市長賞 古橋 淑子
花のごとき仁王の乳房秋うらら
- ◆第五位 加須市議会議長賞 大和スイ子
抱きしめて余る大樹や小鳥来る
- ◆第六位 埼玉県芸術文化祭奨励賞 角 達朗
藤原の氏は永代藤は実に
- ◆第七位 埼玉県芸術文化祭奨励賞 増田 信雄
どの家も柿豊かなり路線バス
- ◆第八位 埼玉県芸術文化祭奨励賞 近藤 睦子
大刈田新病院を誇りをり

◆第九位 加須市教育長賞
おみくじの吉疑わず小春かな
湯橋 信子

◆第十位 加須市観光協会賞
食べられもせぬに色づき烏瓜
小山 敏男

◆第十一位 埼玉県文化団体会長賞
何回も修羅場を踏んで大銀杏
浅野 都

◆第十二位 埼玉県俳句連盟会長賞
あの日から双葉と加須と同じ秋
山口 洋子

◆第十三位 埼玉県現代俳句協会賞
爽やかや友住む町に友と来て
祐成 智美

◆第十四位
碑の文字の翳りにある秋思
高山カツ子

◆第十五位
おぼしまの低き石橋秋日傘
持塚 悦夫

◆第十六位
ひらひらと小判に似たり朴落葉
金子 由男

◆第十七位
神無月間口の広い仏具店
小川 紫翠

◆第十八位
この社猫が主役か新松子
江原 正子

◆第十九位
徘徊に非ず逍遥あのこづち
境 延昭

◆第二十位
天井の龍と天女や照黄葉
神谷 邦男

小川紫翠 記

感銘句の鑑賞

(会報第八十三号より)

県南Aブロック 早乙女 文子

地果てて西日に燃ゆる口カ岬 五明 昇
ポルトガル中西部のヨーロッパ有数の保養地、古代ローマ人に知られた大いなる岬の夕日はすばらしい絶景だろうと思う。想像するのもわくわくする。今閉塞された旅なので、この有大な俳句が身に滲みる。

遠郭公地球の裏の眠る刻 河口 俊江

郭公は哺育を他の鳥に委せて仮親になってもらう習性をもっている。卵は産むだけである。現実には生き抜くには、こんな人生であっても仕方ないことも知れない大いなる地球の生きものとしてである。

清明や巨樹の尾久杉神となる 稲葉明日香

尾久島には千年以上もの尾久杉が世界遺産として存在する。その大いなる杉は清明(春)ともなると神を宿すごとくに神聖な尊い清浄さを感じる。樹には魂を感じてしまうことは巨大なるものに対する畏れだろうか。

県南Bブロック 渡辺 舎人

滝落ちて白き沸点たぎりけり 石井 喜恵
滝の水が滝壺に落下して水面がざわめき泡立つサマを「白き沸点たぎりけり」と主観による写生で活写した。その下降してきた水を上昇する水へと変換させた表現は水の三態変化に通じていて、上五のテには緊張感が漂う。言葉の斡旋が巧みで見事な一句。

ほんたうは遁走したき列の蟻 澤浦 和美

働き蟻は総てメス。よく働く蟻2割。働くが時々サボる蟻6割。全く働かない蟻2割。この割合は人間社会にも当て嵌ると云う。蟻達は仕事は嫌がらず、役目を補填し合うが、掲句はその働き蟻でもそう云うとし、仕事に心を病ませる現代社会を風刺した重たい句。

ぎゆううとうと絞りし檸檬喪主となり 片山 蓉

人は強い悲しみに出会うと別な或る事に没入し、そこから立ち上がるうとする。上五・中七の表現がそれである。主題の「伴侶を喪った深い悲しみ」は読後直ぐに伝わる巧みな構成で、愛し子や大親友を喪った悲しみも内包する。「檸檬」は光太郎の「レモン哀歌」の類いのもの。高質な句だけに回想の助動詞キの連体形シの誤用が気になる。

県南Cブロック

石井 喜恵

秋暑し硝子の皿に薄荷糖

石山かつ子

立秋を過ぎての今日の暑さは特に厳しい。

硝子の皿の透明感と、口に含むと溶け出す薄荷糖の爽やかな甘さで、束の間の清涼感を味わうことが出来た。

秋が好き生まれた季節といふだけで 岡嶋 澄子

云われてみれば私も十一月生まれで秋が大好き。どんなに猛暑でも夏生まれの人はきつと夏が好きと云うだろう。これはもう不変の真理ではないだろうか。

報われぬ努力もありし芋の花 小池 弥生

何とも身につまされる一句である。じゃがいもの花は薄紫、ピンク、白など清楚でとても美しい。たとえ報われずとも努力するとその事にこそ価値があるのだと改めて思った。

入間・比企ブロック

大川原弘樹

ほうたるの灯の点滅は音楽

桑原 三郎

臨場のはっとした感じや作者の氣息が伝わってくるこの感覚は、既存の十七音から一音減数した効果に因る。既存のリズムに言葉のせたらあととは知らないよといった作句態度では、決してこういう効果は期待できない。

夜もあをき山の空なり盃盆会 齊藤 京子

帰帰する先祖や今は亡き誰彼の魂の降臨が

夜空のそのあをさに関与しているのかもしれない。山空は、人智の及ばない領域を信奉し仰ぎ見るものにとつて、憧憬と畏怖の対象であり続ける。

手仕事に風やわらかき扇風機 佐野つる女

風情よりも先ず、利便性を求める日常を省みるように促される句だ。手仕事の作業上、扇風機の風量を上げられない状況なのかもと思えるが、この風のやわらかさは無機的な生活の気持ちの強ばりを解こうとするかのようだ。

熊谷ブロック

吉澤 祥匡

盆の鐘二つは父と母へ打つ 加藤いさむ

生者必滅を思い起こすのがお盆。ご両親の冥福を祈る姿が、はつきりと浮かぶ。鐘は、この祈りの中で、経文を唱えようとするときに打つもの。従って、鐘の音と静かな読経が聞こえてくるようだ。

晩年の身勝手ゆるそう心太 北上 正枝

加齢により人は、我儘になるのが一般的。自分自身のことも含めてとも取れるが、ゆるそうとしたところに、作者の度量の大きさが伺われる。特に、心太が、明るさと腹の太さを増幅している。

夏草や格闘できるうちは立つ 神田 一美

夏草の生命力は、誠に強い。これを退治し

ようとすることは、正に草との戦いであり、格闘であつて、作者は謙虚に、出来るうちは立つとしたところが心地よい。

秩父ブロック

篠田 日織

山一つ置いて闇より大花火 井上 燈女

秩父夜祭の冬花火だろうと合点がいった。武甲山が黒くそびえる空に、尺玉の花火がドカンと大きな音と共に空一面に広がった景は本当に見る者に感動を与えた。夜祭の挨拶句としてうれしくいたたく。

減り続く余生に夢は増える秋 錦川 太郎

老後に残された人生は減るばかりだが、余生を楽しくと思うのは皆同じで夢が増えるに共感。若かりし時秋は、あれもしたい、これもしたい、食べたい、行きたいと忙しかったが、老いても好奇心旺盛なこの句に脱帽。

かなかなや来た道はもう戻らない 久下 晴美

晩夏の日暮れに「かなかなかな」と鳴く蠅。聞いて夏の終る寂しさを無性に感じると共に、今が過去になり、過ぎる時は戻らない事実を認める。付きすぎの感もあるが、心ひかれた句。

北埼玉ブロック

小川 紫翠

刃物研ぐ八月の水尖らせて 金子まさ江

「水尖らせて」に説得力がある。「刃物研ぐ」の新鮮味に欠ける点を、この言葉が払拭

して余りある効果を發揮している。作者の感性が退屈な日常生活に光りを与えているように思う。

本棚は地層のごとし五月闇 小池 弥生

「地層」の比喩が素晴らしいと思う。本棚を地層と感じられる感性に脱帽。取り合わせた「五月闇」の着地も決まっているように感じる。

夾竹桃赤き記憶の敗戦日 小泉 信

内容的にはすでに言い尽くされているような印象もあるが、「赤い記憶」の言葉選びが適切で作品が立ち上がっている。上五の夾竹桃が効果的に効いているように思う。

埼玉ブロック 中村 欽一

嘘っぽい顔しやがって牡丹雪 音無 早矢

春先に降るそばから消え、積る事の無い牡丹雪。「嘘っぽい顔しやがって」と荒荒しい口語表現が効果的。

突きささる暑さや経の反響す 加藤 圭子

厳しい暑さは時に肌を突き刺す様だ。作者は経を読むだけが響く静謐な場所に居る。対照的な取り合わせが句を深くしている。

流水や鍵の容をして眠る 越川ミトミ

結氷した海面が割れ風や海流によって運ばれる流水。それはやがて迎える春の扉を開ける為の鍵となるのだ。

ブロック便り

熊谷ブロック

神田 一美

県の取組には協力し参加できているが、ブロック独自の活動は展開できていないという現状である。

そこで、熊谷市内で、会員十余名が参加している句会をお知らせしたい。現代俳句協会の会長でもあった故金子兜太氏かぶとが、添削指導して下さった時もある「兜かぶとの会」である。毎月第三木曜の午後に開催されている。兜太氏の教えに学び、「俳諧自由」の精神を大切にし、参加者相互が選をし鑑賞を深め、貴重な研鑽の場となっている。前号で、境延昭氏がお書きになっているように「句会を楽しむための文芸が俳句と書いている」である。会費は時に数百円で、どなたでも参加できる。ぜひ会員諸氏の参加を期待する。よかったら、神田までご連絡下さい。(TEL 048-569-1838)

埼玉ブロック

高橋 邦夫

令和四年度の埼玉ブロックでは、コロナ禍の続く中特筆すべき行事等もなく終わりましたが、令和五年度においては、第四十五回埼玉俳句大会を平成二十八年の第三十八回大会以来久し振りに担当することとなり、現在その準備に取り組んでいます。

今回の大会は七月八日の土曜日に、加藤楸邨ゆかりの古利根河畔の春日部市民会館で開催します。現在事前投句の募集中ですので、事前投句と併せて大会成功に向けての皆様のご支援、ご協力をお願いいたします。

大会当日は「虫への祈り」「虫塚紀行」などの著書を刊行されておられる昆虫芸術研究家の柏田雄先生の「昆虫の句碑を訪ねる」と題する講演も予定していますので、楽しんでいただければと思います。なお、埼玉ブロックではこれまでの高橋邦夫に代わり、鈴木砂紅がブロック長に就任し、新たな地区体制が生れることになりました。

これまでの皆様のご協力に厚くお礼申し上げますとともに、これからも変らぬご支援をお願い申し上げます。

諸家近詠 (五十音順)

(さいたま市) 清水 克郎
冬深し渋沢翁や飛鳥山
北風や谷川岳がはるか見ゆ

(上尾市) 鈴木 良二
おほかたは脱走兵や花の山
バタフライ効果たゆたふ春の海

(熊谷市) 篠田 悦子
鮫鯨やもしもしジッパー開いていますよ
着ぶくれて斯くして肝が坐るなり

(さいたま市) 下川 光子
足裏に命の温み草萌ゆる
おもむろに手足動かす余寒かな

(秩父市) 関田 誓炎
名草枯れ吾が産土に亡父が居る
帰り咲く花愛でてゐる妻の朝

(秩父市) 篠田 日織
凍蝶や知らなくても良いこと塞ぐ
へクトパスカルてふ喜怒哀楽かげろえる

(所沢市) 白土 令子
如月や古き映画を薄型テレビ
初音かな大きな窓の磨かれて

(さいたま市) 関根 道豊
九条を懐に若菜野を行く
人間を信じ核なき春を待つ

(川口市) 篠田 葦
腑に落ちるまで笑ひつづける蛙の子
いつかしら座りてストッキング桃の花

(伊奈町) 菅原 卓郎
エイト曳く水脈の真つ直ぐ寒日和
松枝に吾を呼ぶ声初すずめ

(加須市) 瀬戸山千晴
冬青空十二センチの靴下ろす
小春なり五指くつ下の五指五色

(上尾市) 柴田 獨鬼
長箸の重さに堪えて春ゆふべ
いまにして想ふことあり卒業期

(吉川市) 杉浦 理恵
落陽に挑むやサーファー実朝忌
惜しむれど星海へ落つ実朝忌

(さいたま市) 染谷 風子
蔵人は越の国より寒造
静謐を破る雄叫び初稽古

(さいたま市) 渋谷 和江
春近し肩甲骨がむずむずす
またもとの二人となりて雑煮食ぶ

(川口市) 杉本青三郎
鼻の耳から森へ潜り込む
諸手あげ冬木が夜をとりもどす

(白岡市) 高井 元一
冬耕の土の重たし忌を修す
手話の能両手の蜘蛛が雲となる

(さいたま市) 渋谷きいち
潜り戸を開けて待ち侘ぶ臍の夜
黄水仙先ずカンバスに海をあを

(吉川市) 鈴木 砂紅
勢いの一滴頬に筆始
平家音読かたわらに寒の水

(川口市) 高木 宇大
くわうくわうと灯る雪降るマンホール
爺だけが傾いてゐる福寿草

(秩父市) 島田 良江
初日浴ぶビタミンDを存分に
二度見するマイナス九度の温度計

(さいたま市) 鱸 久子
妻整えくれし白髪立春なり
汽車に乗る浜に引鳥送るため

(川口市) 高梨 武州
寒稽古赤きほつぺの豆剣士
雪しまき湯にボス猿の瞑想す

(さいたま市) 高野 義康
節分の豆囃む顛顛に砕け
立春の匂いと思うパン焼ける

(新座市) 高橋 悦子
これからの愉しくなるぞ初雀
月を待つ上手に老いてゆけそうな

(春日部市) 高橋 邦夫
ブラボーと言ひ合へる世へ年迎ふ
木曾殿の京へ弓張る冬の月

(春日部市) 高橋 亨
「つづく戦さ春泥に咲け人間ら
わすれ海恢復できぬままに春

(さいたま市) 高橋比呂子
遠泳や愛脱ぐように水をぬぐ
脱兎のごとし歳旦といえり

(さいたま市) 田口 鷹生
飽食や戦争や寒椿や
空に始まり空に終わるか冬銀河

(桶川市) 田口 武
家で着るのみのセーターゆゑ毛玉
冬の青空をドクターヘリ急ぐ

(川口市) 竹下 潤子
またひとつ夢かき足して冬木の芽
モロッコもイランも漠と春待てり

(本庄市) 竹本いくこ
雪の園孤高なりしや石の貌
指呼の間に雪の赤城の近寄り来

(新座市) 多田 英治
梅一輪踊る心に満つ香り
春立つや詩を忘れた老人哀し

(越谷市) 田中 朋子
甘党も辛党もいて花筵
出走を待つ馬の息花の息

(狭山市) 田中美佐子
大晦日くるくる椅子の高くなり
ベランダ育ちの香草や大晦日

(さいたま市) 田中美穂子
クリオネと戯れる夢夜半の雪
きはやかな富士へ合掌寒夕焼

(さいたま市) 田中やすあき
陽春の野に溶け込めぬ風来り
ゆつくりと仮面を外す露の臺

(吉川市) 樽谷 俊彦
白梅や芭蕉は僕より若いひと
官製の春鬮泡立つ生きものたち

(さいたま市) 千坂 平通
早春の川の流れに耳澄ます
早春の自然の恵み清き空

(さいたま市) 釣 言
宝船貧乏神と相席に
左義長に心頭滅却達磨かな

(深谷市) 塚原 久紅
お気に入りこの皿使う日春近し
そば湯呑む店主の会話小ざっぱり

(朝霞市) 辻村 麻乃
富士塚の上の人にも御慶かな
大水柱誰の罪かと問ふやうに

(宮代町) 手島 互
木更津の次第に香るあさり汁
畑焼や隣の畑と立ち話

(上尾市) 寺井 むつ
寒卵産みたて届く退院日
水仙の陽だまりぼぼと老い困地

(加須市) 寺内 若子
着ぶくれて知らないこと知らないこと
寒夕焼阪東太郎一本杓

(桶川市) 戸部 健次
水草にいのちゆれあふ四温光
死の影の一つが木の葉能舞台

(三郷市) 豊田 いと
流木が二月の海に突きささる
肩掛けをして折紙に夢中なり

(狭山市) 鳥山由貴子
木枯しと約束のカフェ銀河堂
オオイヌノフグリ俯伏せの猫車

(入間市) 長澤 健次
うららかや声の色づくテニスコート
春寒しボタンの探すシャツの穴

(深谷市) 永田 和子
白鳥や一人飛ばない鳥もゐて
節替り下は恐竜姉妹かな

(上尾市) 中野 博夫
手のひらに來て風花の失せにけり
誰か死に終はる小説日向ぼこ

(久喜市) 永野 了子
冬の蜂耳鳴りほどの騒がしさ
冬夕焼自転車ぎしぎし帰りゆく

(越谷市) 中村 欽一
大夕焼風の余熱が身を透ける
桜桃忌行方定めぬ忘れ水

(春日部市) 中村 武男
山鳩が啼く早春の木の根っこ
裏高尾縦走のこと風ひかる

(さいたま市) 中山 洋子
短日や自動シャッター早めにす
流星を待つて十分一つ見ゆ

(さいたま市) 波切 虹洋
常連の鬼も來てをり鬼やらひ
みづうみの水の囁き蘆の角

(富士見市) 成田 叔美
火の恋し母への文の長くなり
滝凍る天と地の音封じ込め

(さいたま市) 新村 長門
赤き冬芽母を介護する少女
日向の窪の紫紺の瞳冬菫

(さいたま市) 西幅 公子
千里來て森に白鳥十六羽
露味噌に野山の匂ひ陽の匂ひ

(川口市) 野田 静香
美容室の外は浜風春近し
春の雲水軽やかに水車小屋

(さいたま市) 野平美紗子
朱色冴ゆ母の遺しし寒椿
外つ国の戦火を想ふ寒夕焼

(加須市) 野本 史子
初紅を引いて八十路の女です
ふんばって農婦つづける鋏始

(さいたま市) 長谷 郷子
海底に目覚めし蝶か白い骨
新型のウイルスの飛ぶ春乱調

(熊谷市) 長谷川順子
ほわーっと欠伸秋明菊の白さかな
綿棒のぎっしり勤勞感謝の日

(伊奈町) 畠中 耕
新年やミサイルで迎ふウクライナ
合戦の土塁紅色初日の出

(川口市) 浜田天瑠子
足音は歩ける証春立ちぬ
戦とう恐ろしきもの虎落笛

(狭山市) 林 生子
電工へ軒先を貸す小春かな
指先を反らす体操蓮の花

(越谷市) 原 博子
卒寿なり五年日記に決めて買い
冬晴や川越散歩八千歩

(川越市) 原 雅子
気短かに降つて上がりぬ初霰
橋桁に光散らせり冬の水

(さいたま市) 原 美智子
明け星を今生みし如冬木立つ
風花舞ふ手に受けむとて子らも舞ふ

二〇二二年度
後期新会員紹介

新井 孝 磨

埼玉県さいたま市見沼区
堀崎町一三五―一

河野 はるみ

埼玉県草加市吉町一―五―四三
第一グリーンハイツ一〇―一

小林 京子

埼玉県さいたま市桜区
西堀二―五―一六―六〇二

笹本 啓子

埼玉県さいたま市浦和区
前地三―八―一八

菅原 真理

埼玉県さいたま市南区
鹿手袋六―二〇―一六

千坂 平通

埼玉県さいたま市見沼区
南中丸一―二九―四

森 美枝子

埼玉県さいたま市大宮区
三橋四―六〇五

戸部 健次

埼玉県桶川市上日出谷南二―九―四七

◆ 句集の紹介 ◆

★『永字八法』 星野 和葉

◎出版年月日 令和四年九月十一日

◎出版社 東京四季出版

いつの間にか月日が経ってしまっただ感じの四十年の証の様な句集である。句集名は（筆持てば永字八法白木槿）より引いた。一度は諦めかけた句集であるが、こうして上梓出来た事を大変嬉しく思っている。

自選三句

小さき影動く浅春の潮溜り

青年の歩巾五月を一直線

陶枕に夢だけ残し骨董市

★『あかときの夢』 柴田 獨鬼

自選三句

あかときの夢儼まるる鉦かな

うつし世のものみな揺れて水陽炎

短夜や幸と不幸のはざまにて

評論出版

★「俳句空間の言語」 後藤 章

埼玉県現代俳句協会顧問・参与及び役員

顧問	島田 妙子・桑原 三郎・山崎 十生	
参与	石 寒太・岩淵 喜代子・中村 武男・関田 誓炎・加藤 いさむ	
会長	杉本 青三郎	
副会長	堀之内 長一・田中 朋子・渡邊 樹音	
理事 ◎ブロック長	県南Aブロック	◎後藤 よしみ・知念 哲庵・篠原 葦
	県南Bブロック	◎山本 鬼之介・高橋 比呂子・鳥海 美智子・日高 道を・青木 鶴城
	県南Cブロック	◎保坂 翔太・石井 喜恵・中野 博夫・染谷 風子・菅原 卓郎
	入間比企ブロック	◎大川原 弘樹・北上 正枝・飛鳥 慧・望月 宮子
	秩父ブロック	◎福島 ときみ・新井 史子・藤澤 晴美
	熊谷ブロック	◎神田 一美・吉澤 祥匡・長谷川 順子・渡辺 智恵
	北埼玉ブロック	◎折原 野歩留・小川 紫翠・福島 芳子・江原 正子
	埼玉葛ブロック	◎鈴木 砂紅・尾堤 輝義
監事	知念 哲庵・篠原 葦	
幹事	事務局長	大川原 弘樹 事務局次長 中野 博夫
	会計係	田口 武

「埼玉風土記」シリーズ (8)

蔵原伸二郎の詩碑

大川原 弘樹

写真は飯能市天覧山の登り口にある詩人蔵原伸二郎の詩碑。



明治32年に生まれ昭和40年に亡くなる。熊本阿蘇に生まれ慶応義塾大学進学のために上京。在学中に詩や小説を書き始め、昭和14年に刊行された処女詩集『東洋の満月』が萩原朔太郎や川端康成に激賞される。『四季』同人。戦中入間郡吾野村に疎開し敗戦を迎え、戦後は飯能に移り住んだ。

その後は戦時中に発表された国威発揚的な作品が指弾され、中央詩壇からは距離を置きつつ貧困と失意の中に贖罪の詩を書いていったという。一方で、その人柄が地元の人々に慕われ、校歌の作詞や文化財保護の活動などもしていたそうである。

晩年、第七詩集『岩魚』で読売文学賞を受賞も直後に病没した。大学の同級生である作家石坂洋次郎は短編「ある詩集」の中で「目の膜がはがされたように、蔵原の詩の一行一行が、私の脳裏に鮮明に強烈に灼きつけられた」と同詩集を讚美し故人を偲んだ。

写真の詩碑に刻まれたのは最後の詩集『岩魚』の最初の一篇「めぐつね」の冒頭の一節である

野狐の背中に
雪がふると
狐は青いかげになるのだ
吹雪の夜を
山から一直線に
走ってくる その影

俳句大会等順番表 (令和3年~12年)

ブロック名	俳句大会	吟行会	定期総会・一句会
県南Aブロック	令和 9年 (2027年)	令和10年 (2028年)	令和11年 (2029年)
県南Bブロック	令和 8年 (2026年)	令和 9年 (2027年)	令和12年 (2030年)
県南Cブロック	令和 6年 (2024年)	令和 8年 (2026年)	令和 9年 (2027年)
人間・比企ブロック	令和 3年 (2021年)	令和 5年 (2023年)	令和10年 (2028年)
熊谷ブロック	令和 4年 (2022年)	令和 6年 (2024年)	令和 7年 (2025年)
秩父ブロック	令和10年 (2028年)	令和 7年 (2025年)	令和 6年 (2024年)
埼玉ブロック	令和 5年 (2023年)	令和 3年 (2021年)	令和 4年 (2022年)
北埼玉ブロック	令和 7年 (2025年)	令和 4年 (2022年)	令和 5年 (2023年)

参考

会報編集委員会

- 委員長 加藤いさむ(副会長)
- 委員 高橋比呂子(県南Bブロック)
- 委員 北上 正枝(人間・比企ブロック)
- 委員 小川 紫翠(北埼玉ブロック)
- 委員 越川ミトミ(埼玉ブロック)

二〇二三年度会費納入のお願い

年会費 一、〇〇〇円
 会計担当 渡邊 樹音
 住所 〒340-0031 草加市新里町一〇一〇
 電話 〇四八一九二九一二五六一

◆編集後記◆

自然災害だけでも大変なのに、ロシアによるウクライナ侵攻は混迷を深めている。ロシアの思想家が「プーチンが勝たなければ、世界が滅びる」と話していた。日本も失われた二〇年と言われ、政治の衰退に直結している経済、社会の衰えが懸念されている。我々も、俳人である以前に人間なのだから、俳句と同様、自分で考え行動することが大事であると思う。

埼玉県現代俳句協会も、四月から新体制に入ります。皆様のますますの御健吟とご活躍を祈念致します。

(高橋比呂子記)

【事務局 住所】

〒三四七〇一〇二 加須市日出安九六八一三
 電話 〇四八〇七三〇五二二(加藤いさむ)

第八十四号 令和五年三月十五日 発行
 発行人 山崎 十生
 発行所 埼玉県現代俳句協会
 〒三三三二〇〇一五
 川口市川口五一一一三三三
 電話 〇四八二二五一七九二三

編集責任者 加藤いさむ
 印刷所 有限会社 千葉印刷